

移民革命、社会革命、そして日本文明のルネサンス

坂中英徳

究極の目標は日本文明のルネサンス

以下は、私の移民国家ビジョンに寄せられた感想である。「千年来の移民鎖国からの歴史的転換」（日本文明史家）。「明治維新以上の革命」（外国人問題の研究者）。「移民革命の先導者」（米国人ジャーナリスト）。「日本の救世主」（英国人ジャーナリスト）。

日本の歴史を概観すると、日本人は小さな改正を積み重ねて生き延びるのは上手だが、根本的な変革や革命は好まない民族ではないかと思うことがある。

日本の歴史上、「大化の改新」と「明治維新」はれっきとした新国家の建設であった。だが、なぜか日本人はそれを「改新」「維新」と呼んで「革命」とはいわない。日本人は国の断絶を嫌い、国の継続を尊ぶ民族なのだろう。もっとも、日本人は革命をやらなかったのかもしれないが、先人の英知と努力のおかげで日本文明は地球文明のなかで確固たる地位を占めている。

しかし、今日の日本は、世界の歴史に例のない「人口秩序の崩壊」という国家滅亡の危機にある。日本文化の担い手である日本民族が消えてゆく開びやく以来の危機に臨んで、日本人が得意のちまちました改革をいくら積み重ねても、今度ばかりは日本民族の永続の可能性は薄いといわざるをえない。日本の崩壊を阻止するには日本の歴史に例のない本物の「革命」が必要だ。

2005年以来、移民政策研究所所長として移民政策の推進役を務めてきた私は、人口秩序を正す切り札の移民革命を実施すること、それ以外に日本民族の消滅を免れる方法はないと主張している。移民革命は、国籍と民族の垣根を越えて国民と移民が一丸となって日本の一大危機を乗り越えるものだ。それは社会革命を伴って日本革命へと発展する。

人口体系が壊れる民族的危機を克服するため、平成の日本人が国運をかけて行う平成革命である。移民に対する入国の扉を全開し、国の形を多彩な民族が平和的に共存する移民国家に改め、人口ピラミッドを正常な形に戻すのだ。

未曾有の規模の移民を入れる移民革命は劇薬である。しかし、それはいわば「民族の自然死」に向かって衰弱してゆく日本民族が健康を回復する万能薬なのだ。

同時に、わたしたち日本人は、理想の移民国家の完成を目指して、1000年以上続いた移民鎖国時代に形成された島国根性を克服し、移民と良好な関係を結び共存する「地球人」に成長しなければならない。子々孫々の日本人が理想像に向かって絶え間ない努力を重ねれば、100年後には人類未踏の人類共同体社会を構築できるであろう。

究極の目標は日本文明のルネサンスである。「日本人」と呼ばれる民族が地球上に永遠に

存在することである。これは言葉の真の意味での日本の文化革命だ。

われわれの祖先は不屈の精神で幾度もの民族的危機を克復してきた。人口ピラミッドの崩壊が引き起こした民族存亡の危機も、日本人の英知と精神力で切り抜けるにちがいないと確信する。

人口崩壊の時代を乗り切るための社会革命を断行するとともに、速やかに移民大国への転換を図り、今世紀中の移民解放政策を貫き通せば、100年以内に人口が減りも増えもしない「静止人口」の社会を迎えるだろう。わたしは地球規模で深刻化する人口爆発問題、環境問題、食糧問題、エネルギー問題などを考慮すると、現在の英、仏、独とほぼ同じ規模の7000万人台の人口で落ち着く社会が望ましいと考えている。

以下は、人口静止社会に生きる日本人の理想像である。田園と里山が広がる日本列島で悠々自適の生活を楽しむ日本人。安寧秩序が保たれた社会で平穩に生活する日本人。地球上の諸民族が勢ぞろいした多民族社会で多様な民族と仲良く暮らす日本人。

すべての人種・民族・国民は移民の末裔である

世界の多士済々が永住を希望する移民国家に生まれ変わらなければ日本の明日はない。人口減少期に入った日本は、先祖代々の日本人だけで国家・社会・経済を運営する時代は終わった。

移民反対派の人たちは、移民が入ってくると、日本民族と日本文化の純粋性が損なわれると口をそろえて言うが、日本民族も日本文化も純粋培養されたものではなく、ほかの要素が多量に入って創造されたものであることを理解しない。

日本の文化が外国人観光客をひきつけるのは、日本文化が世界各国の文化の精髓を取り入れた雑種文化の典型だからである。言語、料理、宗教、芸術、道徳、社会規範などの総合体としての日本文化は、世界のどの民族も理解可能な普遍的なものである。仮に全然まじりけのない純粋文化だったとしたら、外国人観光客はそんな日本文化に共感を覚えないだろう。

およそ人類社会において他の民族の血がまったく混じっていない純血民族など存在しない。人類の先祖に最も近いとされる黒人の中にもいない。悠久の人類史は移動と定住の歴史であり、いっぽうで人類は異なる民族間の結婚と混血を繰り返し、現在の人類社会で見られるような多様な民族と国民に分かれた。

今日、地球上に存在するすべての民族は移民の末裔であるとともに雑種民族である。日本では1000年以上移民鎖国体制が続いたので日本人は比較的純血度の高い民族だが、それでも太古の昔から世界各地から移住してきた民族の血がまじりあって形成された雑種民族であることに変わりない。

1000年後の人類社会を展望すると、地球上から地理的・国家的・文化的障壁がなくなっており、人類の自由往来の時代を迎えて異民族間の結婚と混血が爆発的に増えた結果、

人類の大半が人種的に単一のものになっているだろう。すなわちそれは単一の種から進化した人類の先祖返りであるとともに、究極の雑種民族としての地球人の誕生である。その時代には「戦争のないユートピア世界」が実現しているかもしれない。

日本国の存続に移民革命プラス社会革命が必要

わたしは日本の歴史に類を見ない規模の移民受け入れを提案している。しかし、50年間で1000万人の移民を入れても、日本の総人口は3000万人減るという厳然たる事実を忘れてもらっては困る。3000万人の人口減が政治・経済・財政・社会・国民生活に及ぼす影響は想像を絶するものになる。

たとえ日本が世界のモデル国と呼ばれる移民国家に転身したとしても、若年人口の激減に高齢人口の激増が重なる人口秩序崩壊に耐えられず、政治制度をはじめ産業・財政・年金・社会保障・教育などすべての制度の存続が危うくなる。新しい国づくりには移民革命とあわせて社会革命を行うことが必須条件だ。

つまり、日本史上最大規模の移民を入れても、深刻化する人口問題の根本的解決にはならないということだ。平成の日本は、150年間続いた人口増加期に形成された国民の生き方・生活様式から政治・経済・財政・社会・教育などの諸制度に至るすべてを根源から見直し、人口規模に見合った国に生まれ変わらなければならない。これは日本の歴史はじまって以来の日本革命に発展する。

それは世紀の大事業となる。移民1000万人の受け入れの比ではない。政治・行政・国民が一致団結し事に当たらなければ成就しない。事業の完成には100年の時間を見込んでいる。

しかるに日本の現状はどうだ。人口増加時代につくられた国家制度について、人口減少社会に柔軟に対応できるスリムな体質の国への見直し作業はまったく進んでいない。本格的な人口減少期に入ったというのに古い日本の体制のままである。もはや人口増加時代の遺物と化した「肥大化した日本」の抜本的変革なくして日本の明日はないといわなければならない。

だが関係省庁がこの問題に危機感を持って取り組む姿勢はまったく見られない。それははじめから分かりきったことだ。自らの血を流すような変革を保身にたけた官僚が行うはずがない。国の統治組織の基本にかかわる問題であるから政治のリーダーシップに期待するしかない。

しかし、国会議員が率先垂範して、人口減少期をもちこたえるための最小限の政治制度改革、たとえば国会議員の定数の大幅削減、二院制の基本的なあり方の見直し、国から地方への権限委譲と中央集権体制の抜本的改革など、自らの身を削る政治制度改革を行うとはとうてい思えない。

既得権を手放す気のない政治家に自助努力が期待できない以上、主権者たる国民が社会

革命と政治制度改革を政治に迫るしかない。その場合、国民も、人口崩壊の大波がもたらす困難に耐えるため生活水準を落とす覚悟で臨む。それとともに、国籍・民族・世代を問わずみんなが平等に痛みを分かち合う日本精神の形成に努力する。

たとえば、超少子・超長寿社会を生き抜くために、生活のあり方を「シンプルな文明生活」に改める。社会保障制度は当てにせず、元気な人は80まで働く。基本的に国や社会には頼らず、自分の命は自分で守ることを旨とする。

国民の分断を免れる究極の選択肢——移民国家の創立

2014年末現在の国と地方を合わせた長期債務残高は1000兆円を突破した。超少子高齢化の進行とともに国の抱える膨大な借金はこれからも増え続ける。生産人口が今よりほぼ半減する50年後は、国民一人当たりの借金の額は想像を絶する規模になる。金の卵の新生児は膨大な借金を背負って生まれてくる。その時代に生きる少年少女は日本人に生まれたことを悔むにちがいない。

政治家も官僚も、財政と社会保障制度が瓦解した地獄絵のような日本の将来を見て見ぬ振りをしている。だが、人口秩序の崩壊が引き起こした財政問題を直視し、今すぐ有効適切な手を打たないと、日本の悪夢が50年を待たずして現実のものになるのは論をまたない。

まず、膨れ上がる一方の社会保障費の負担をめぐって若年層(負担者)と高年層(受益者)の対立が激化する。続いて世代間闘争が勃発する。最悪の場合、国民的規模で骨肉の争いが始まることにもなりかねない。これ以上の悲しい出来事は人類社会の歴史にも例がないのではないか。

日本の悲劇を免れる究極の選択肢は移民国家の樹立だ。国民の分断という、絶対あってはならない事態を阻止する方法は、猛烈な勢いで減少してゆく若年人口を補うのに効果的な移民政策をフル活用するしかない。もはや一刻の猶予もならない。遅きに失すれば、財政状況はますます悪化し、手がつけれなくなる。

人口崩壊と財政破綻を回避し、最小限の社会保障制度を後世の国民に残すために、移民国家ニッポンの建国について国民合意を取りつけるのは政治家の責務だ。世代間の利害の調整を図って国民統合を維持することは、日本政治に課せられた最優先課題だ。

若い世代が日本人に生まれてよかったと実感できる新国家の建設に政治生命をかける政治家の出現を切望する。

平成の指導者の奮起を促す

平成時代のパワーエリートたちは、「どうしてこんな日本になったのか」「いま自分たちは何をなすべきか」について真剣に考えたことがあるのだろうか。

人口崩壊の危機に端を発した国家存亡の危機に見舞われているというのに、日本の生き残りをかけた活発な「議論」すらなされていない。政治家、官僚、知識人、経済人、ジャーナリストは人口危機も国家危機も正視したくないのか。日本人が得意の「臭い物に蓋をする」という姿勢なのか。

ならば白日のもとにさらそう。人間がいてこそその国家と社会と経済と文化である。日本人が続々消えてゆく日本は奈落の底に沈む。

日本の指導層の中に憂国の士はいないのか。人口崩壊の恐ろしさ見抜く慧眼の士はいないのか。日本の全面崩壊を救う救世主はいないのか。

早く外科手術をしないと日本の命が危ない。しかし、国民は人口問題が日本の命取りにつながりかねないことを理解しようとしな。根本原因が見つかれば、どこにメスを入れれば助かるかはわかる。命を救う道は必ずある。

「人口」は、たとえば、日本が直面するデフレ経経、巨額の財政赤字、成長戦略が立てられない経済の弱体化などの諸問題の根底にあるものだ。出生率の低下と人口の高齢化の問題に正面から取り組まない限り、これらの経済問題を解決できないことは誰の目にも明らかである。それを知らないふりをし、あるいは小手先の修正で何とか済まそうとしているのだからどうしようもない。

人口は「出生者」と「死亡者」と「移民」の三つの要因で決まる。これはピタゴラスの定理のようなものだ。超少子化時代の日本は、長期間にわたり出生率の向上が望めない以上、人口秩序を正す方法は移民政策しかない。これは自明の理だ。

今日の日本のリーダーに求められるのは、人口秩序の崩壊に移民革命で立ち向かう勇気だ。移民国家の創建に邁進する気概だ。人口増加時代の遺物の政治・社会・経済・財政・教育などの諸制度を根底から改める実行力だ。

移民を受け入れる覇気のない国民に明日はない

人口崩壊時代の日本の国のあり方として、理念上は、移民に頼らないという選択肢も考えられる。「小さいながらも美しい日本への道」である。1990年代後半の入管時代、私はそのような「滅びの美学」にひかれるところがあった。

人口の自然減をそのままの形で受け入れ、少なくなった人口に見合った「ゆとりある日本」を目的とするものである。人口の自然減に従って、9000万人の人口になればそれに適した社会をつくり、4000万人の人口になればそれに適した社会をつくるというものだ。

人口は国家と経済と社会を構成する基本的な要素である。人口の減少が続けば、国勢は衰える。経済は縮小する。社会の多くが消滅する。そのことは承知のうえで、人口の自然減を日本が成熟段階に入ったことに伴う必然的な社会現象であると受け入れ、国民の生き方・生活様式から社会経済制度・産業構造に至るすべてを人口減少社会に適合するものに

改めるといふものだ。

ここでひとつ強調しておきたいことがある。4000万人の人口減に耐えられる社会をつくるのは、1000万人の移民を受け入れること以上の難事業になるということである。生活水準を落とす覚悟が国民に求められる。豊かな生活に慣れた文明国の国民にとって窮乏生活は耐え難いものにちがいない。

たとえば、国民は、生活様式を「贅沢な生活」から「質素な生活」に改める必要がある。少子高齢化社会の社会保障制度を支えるために、増税などの負担増と、年金などの給付水準の低下に耐えなければならない。

万一移民ぎらいの国民が多数を占め、人口減の日本に積極的な意義を見だし、「美しい衰退の道」を選択するといふのであれば、1000万人の移民の協力を得て新しい国づくりを目ざす私の出る幕はない。あまりにも絶望的な日本人の美意識についていけない老人は去るのみである。

ただこれだけは言っておきたい。移民を受け入れる覇気のない国民に、人口崩壊時代の苦難を克服する意志も、生き方を根本的に変える気力も、おそらく望めないであろう。東日本大震災からの復興がかなわないばかりか、遠からず経済も財政も国民生活も行き詰まるのは必至だ。やがて手つかずのままに放置された問題や矛盾の深まりとともに「みにくい衰退の歩み」を加速させることになる。

それでは、人口ピラミッドの瓦解に伴う日本崩壊を免れる方法はあるのだろうか。理論上は、直ちに革命的な移民政策を実行して世界から有為の人材を移民として迎えること、同時に人口が長期的に安定するとされる2・07の出生率を国家目標に定め、出生率の向上に資するあらゆる政策を動員することが考えられる。その場合でも、社会革命と政治制度改革を行い、人口減少社会の身の丈にあった国家に生まれ変わることが日本存立の必須条件である。

坂中移民国家構想が動き始めた

著作・論文の形で発表した「日本型移民政策の提言」は国民の大多数から無視されている。私の移民国家構想を評価する日本の知識人も皆無に等しい。日本の歴史はじまって以来の革命的な移民政策を提案しているのだからそれは当然のことだ。大構想に対する国民の理解が得られるまでにはもう少し時間が必要なのだろう。

いっぽう、私の政策提言に対して違和感を覚えた日本人は多数にのぼると想像するが、移民国家論を覆すような反論も、移民政策に代わる人口崩壊危機への対応策も見られない。

それが幸いした。「移民50年間1000万人構想」は無傷のまま生き残った。いまその歴史的な移民国家ビジョンが動きだした。インターネットの世界では若い世代から移民歓迎の声が上がった。私が会った世界の巨大機関投資家は日本型移民国家構想の早期実現に期待を示した。内閣府は2014年2月、「移民100年間2000万人構想」を発表した。

そして本年3月、英国BBC放送は坂中移民国家構想を世界に紹介した。

以下は私の希望的観測である。国民の間から積極的な移民反対の声が出てこない状況が明らかになれば、日本のビッグバンが起きる可能性がある。つまり、国民からあまり歓迎されない移民国家への転換が、ほかに有力な代案が見つからないという理由で、人口崩壊の危機を乗り越える唯一の国家政策として独り歩きし、政府の基本方針に発展するかもしれない。

私は昨年10月、白熱化することが予想される移民国家論議における基本文献として活用されることを願って、『新版 日本型移民国家への道』（東信堂刊）を世に送り出した。本年5月には、世界の人々がいただく日本イメージを「世界に開かれた移民国家」に変えたいと思って、移民国家理論の集大成の英文図書：「Japan as a Nation for Immigrants」を発行した。この二つの論文集の出版をきっかけに移民国家への道が開けることを期待してやまない。